



最適な商品を一時的な視点でご提案します

株式会社ムトーは、1947年に創業。2017年10月にYKK AP株式会社の取扱店としてビル用住宅用サッシ製造販売、木製建具製造販売しています。

昨今、新しい生活様式においては『こまめな換気』が推奨され、換気・衛生意識が高ま

り、窓を開閉する回数や頻度も増加しています。そのような背景を受け、引違い窓の開閉の際、人の手が直接触れる部分に抗菌・抗ウイルス加工を施した操作部品がYKK APより販売されました。対象は、住宅用引き違い窓の操作部品のうち[クレセント][サポート引手]

でSIAA(抗菌製品技術協議会)の抗菌加工および抗ウイルス加工の認証を取得しています。

クレセントはノブとクレセントロックに、サポート引手は操作引手に塗装を行い製品の表面上おける細菌の増殖を抑制

する抗菌加工と、製品上の特定ウイルス数を減少させる抗ウイルス加工を施しています。既存住宅に設置された引違い窓のクレセント交換に対応可能な、汎用性のある[取替用クレセント]もございます。

◎ムトーは、施設の空間一時的に最適な窓をご提案します。

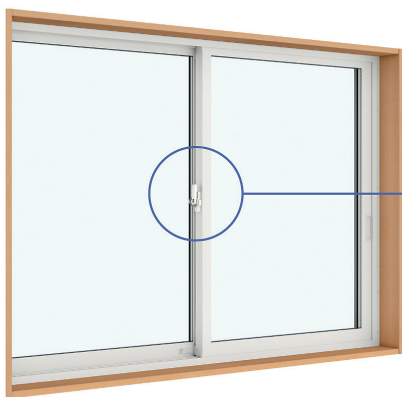
居室フロア: 樹脂複合窓による健康・快適光熱費削減

共用フロア: 窓 共用空間の空間設計に対応するアルミ商品から提案

エントランス: 感染症対策としてアルミ自動ドアの非接触提案など

それぞれの場所に最適な商品を一時的な視点でご提案させていただきます。

皆様とお話する機会を頂ければ幸いです。



引違い窓 クレセント



建築確認検査、住宅性能評価、

住宅かし保険、構造計算適合性判定、

省エネ適合性判定などの業務を行っています。



一般財団法人 愛知県建築住宅センター



CONTENTS

法人協力会通信 63 株式会社ムトー 岡田 好生	表紙裏
地域会だより	1
連載【隔月 全6回】建築とデジタル技術の承前啓後 第2回 - 古くて新しいデジタル技術(中編) - 水谷 晃啓	2
愛知発:活動報告 第15回 JIA愛知 美術サロン展4年ぶり開催! 小田 義彦・小島 篤・田中 英彦・花岡 正康・福田 一豊 増田 舞子・山田 尊久・山田 正博・吉川 法人	4
第28回 JIA東海学生卒業設計コンクール2023 最終結果のお知らせ	6
私の仕事 09 まちづくりの系譜 コミュニティアーキテクト 沼田 勲良	6
保存情報 第258回 データ発掘:庄内用水路の活用 塚本 隆典	7
編集後記 廣瀬 高保・江川 静男	7
JIA建築家大会2023東海in常滑:開催記念特集 02 大会のつくり方と意義 浅井 裕雄	8
寄稿 家康 × 原風景 = 富士山 ～家康の原風景は、どのような行動を起こさせたか～ 塩見 寛	9

地域会だより 今後の予定

- JIA東海支部
・7/28 第2回支部役員会
- JIA静岡地域会
・7/13 静岡地域会役員会の開催(WEB同時開催)
- JIA愛知地域会
・7/14 賛助会 企業PR会
・7/14 第2回役員会
- JIA岐阜地域会
・7/18 第3回役員会 18:30～20:30
・7/22 JIAの窓、講演会
建築家 辻琢磨氏(403architecture・辻琢磨建築企画事務所)
場所:岐阜ビル(岐阜県岐阜市若宮町6丁目2) ※開始時間調整中
- JIA三重地域会
・7/8 JIA三重 建築ウォッチング
「水都大阪の歴史と今をめぐる旅 -中ノ島周辺散策-」

表紙 常滑の景色……④「煙突の終わりの始まり」

常滑の風景といえばレンガ積み煙突。最盛期には400を超える煙突から黒煙が上がっていたそうです。今では、やきもの散歩道を歩いていると、煙突の先から木が生えていることを見かけます。これらの煙突は、当初もっと高いものですが、地震などの倒壊がこわいので、崩したレンガを煙突の内側に放置した結果、このような姿になっています。鳥などが暮らしている姿も目にし、自然に戻っていくかのようです。これが煙突の終わりの始まり。



浅井 裕雄 (JIA愛知)
裕建築計画

古くて新しいデジタル技術(中編)

□建築デジタル技術の源泉と同時代性

我が国の建築分野におけるデジタル技術応用において、服部正の言う「思考のアルゴリズム化」即ち、デザインの問題として黎明期から積極的にデジタル技術を取り入れようと試みていたのは、清水建設研究所の太田利彦・佐藤庄一、京都大学川崎研究室の笹田剛史、東京大学丹下健三研究室であったことを前回で述べた。

太田と佐藤らは、コンピュータによる平面計画のオートメーション化を1967年頃から試みている。笹田は1991年の建築学会賞受賞の際に、「建築雑誌」(1991年8月)において京都大学・川崎清研究室の博士課程に在籍していた1966年に、同研究室において1970年に開催された日本万国博覧会(大阪万博)の根幹施設の設計に参加し、アイデアをチェックしわかりやすく表現するコンピュータ・システムの開発と研究を行ったと述べている。丹下研においてデジタル技術の応用に取り組んだのが名古屋にある高校の先輩後輩でもあった山田学と月尾嘉男で、前回でも触れたように丹下研のアーバン・デザイン理論と関連した試みを行った。こうした試みの結実となったのが笹田も関わった大阪万博において行われた、会場基本計画のための眺望シミュレーションへのデジタル技術の応用であった。

ここで触れた試み以外にも含め、この時期はデジタル技術応用の可能性を追い求める者たちによって各々で同時多発的に試みられていたと考えられ、現在は専らインターネットやAIとの交流から行われている技術や情報の共有が、大阪万博のような国家的なプロジェクトを介して人的な交流によって行われた時代で

あった。前回での告知通り、今回は丹下研の試みを紹介する。次回は人的な交流がキーとなっていた時代背景を意識しつつ、笹田が在籍した京都大学川崎研究室との接点を探りながらこの時期の我が国のデジタル技術応用事例を紹介したい。

□丹下研におけるデジタル技術の導入

1961年に発表された「東京計画1960」で昇華された丹下モジュールをはじめとした、建築設計手法と都市の諸現象の定式化から秩序体系を導く都市解析手法が、丹下研のデジタル技術導入の素地となった。この素地となった「東京計画1960」以前の1950年代の建築・都市設計手法とデジタル技術利用の関係は、拙論「丹下健三研究室のコンピュータ利用の再評価と今日的意義について：一コンピュータ・シミュレーションを用いたデザイン手法とその理論に着目して」（日本建築学会環境系論文集 第81巻第723号，日本建築学会，2016年，487-494頁）から、その詳細を参照願いたい。

丹下研のデジタル技術導入を理論的に牽引したのは山田、月尾の先輩にあたる磯崎新であった。「建築文化」(1963年12月号)の特集「日本の都市空間」において磯崎は「都市デザインの方法<見えない都市>へのアプローチ」という論文を発表している。磯崎はこの論文で、それまで都市計画に積極的に導入されることがなかったコンピュータの可能性を指摘した。加えて、20世紀になって以来の都市デザインの方法論的展開を跡づけ、それらがデジタル技術による操作に還元可能であるという方向性を示した。

磯崎はこの論文の中で、C.アレグザンダーとM.L.マンハイムの「高速道路計画におけるグラフィック・テクニクに関するスタディ」を紹介している。この試みは、高速道路建設における26の決定要因を集合論的にパターン化し、それらを重ね合わせることで最も優れた条件を発見するというもので、実際にコンピュータ処理を用いてはいないものの、その後発展したコンピュータ・シミュレーションによる最適化手法の考えと通底するものであった。磯崎は「この萌芽的なスタディが出現すると、それまでの都市デザインの諸方法が一瞬にして古ぼけてみえはじめた。それだけ強烈な、潜在的可能性を秘めていたのである」と書いた。

□「東京計画1960」から「大阪万博」へ

磯崎によってアレグザンダーらのシミュレーション手法が持ち込まれて以降、大阪万博に至るまでの間に、丹下研のアーバン・デザインにおけるデジタル技術応用は推進された。都市計画学会に提出された1966年の「道路の景観設計(ヴィスタによるシークエンスの構成)」、1967年の「URTRAN」の開発、「万国博覧会場内の観客流動と視覚構造」という一連の学会論文と同年に建築文化で組まれた特集「アーバン・デザインの追求」(1967年4月号)において関連する試みがまとめられた。

これらの試みはすべて「アーバン(Urban)」と「アルゴリズム(Algorithm)」から造られた造語「ウルゴリズム」という概念の下に開発が行われたとされた。特集で紹介されたコンピュータ利用の試みは「ウルボット」というデザインのオートメーション化を可能とするコン

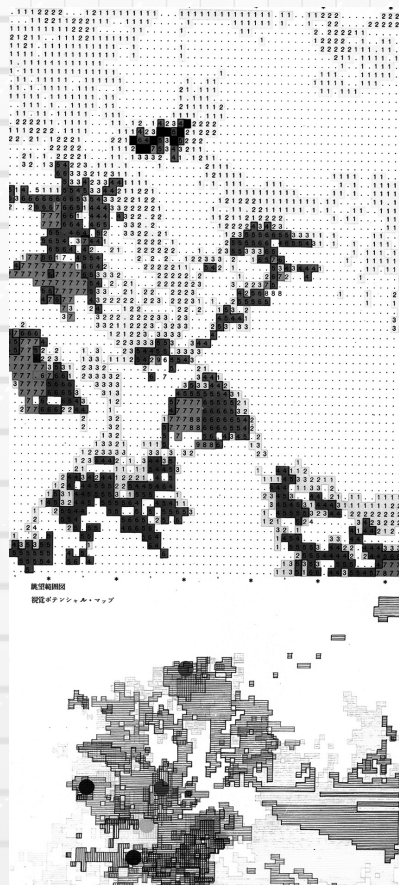
コンピュータ・ツール開発のためのサブシステムであり、「URTRAN」という都市デザイン専用のコンピュータ言語開発をめざしたものであった。同時期に発表された論考「スコピエ計画の解剖」において、1965年を軸に都市デザインの方法が多様な展開を見せ始めたことが述べられた。この論考で、それまで用いられたことがなかった都市をデザインするための「道具にコンピュータを登場させよう」と試み、スコピエ計画ではコンピュータに置き換え可能な都市デザイン方法が用いられたと述べられた。

都市計画学会に提出された論文のタイトル「万国博覧会場内の観客流動と視覚構造」が示すように、スコピエ計画の後に取り組まれた大阪万博の会場設計に際しコンピュータ・シミュレーションを導入した。また高度経済成長期の日本を象徴する国家的なプロジェクトである大阪万博の目玉となった「お祭り広場」では、磯崎と月尾によってコンピュータを用いた環境演出が行われた。

□丹下研のデジタル技術利用の特徴

前述の一連の学会論文と先の「アーバン・デザインの追求」に集中的にまとめられた以外に「21世紀の日本—その国土と国民生活の未来像」（新建築社、1971年）でも紹介された。これらにまとめられた丹下研のデジタル技術を応用したプロジェクトは、大きく二つのタイプに分類することができる。一つは人口や交通など統計データを扱うタイプで、もう一つは「磐梯・猪苗代観光開発計画」から万国博覧会会場の視覚構造の計算に至るまで取り組まれた知覚データ、イメージ

(図1) ※眺望範囲図と眺望ポテンシャルマップ

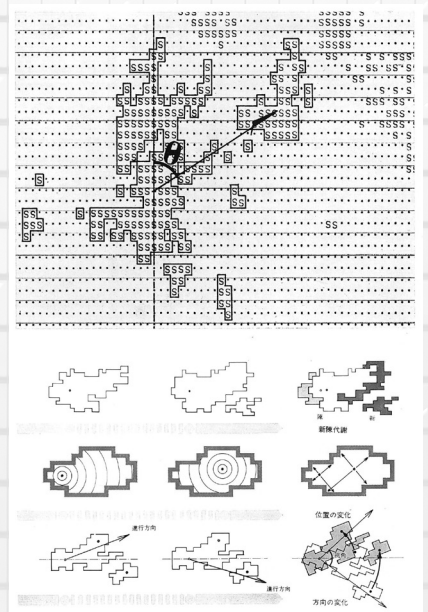


を扱うタイプである。

このなかでも丹下研のデジタル技術応用にとって重要となったのが視覚構造を扱ったもので、ある視点位置において見渡すことができる眺望範囲の地図化をコンピュータ処理によって得る試みであった。この試みの基本的なプロセスは、対象敷地をグリッドで分割して各々の交点に標高データを入力し、ある交点からその他の交点が見えるかどうかの演算をコンピュータが行い、演算結果をプロットすることで眺望範囲が図示される(図1)。

丹下研は「見える」・「見えない」といった計算処理のレベルにとどまらず、眺望需要の高い重要建物をプロットし、その被眺望範囲の演算を行うことで被眺望範囲図を作製した(図2)。このように

(図2) ※被眺望範囲図



空間の視覚構造を空間認識のレベル、つまり処理の問題としてではなくデザインの問題として扱った点が特徴であった。先のアーバン・デザインの専用言語である「URTRAN」の開発において重要な統合概念として紹介した「ウルボット」は、「リボット」「グラフィット」というサブシステムを持っており、二つのタイプに分類できるうち統計データを扱うタイプが「リボット」にあたり、知覚データやイメージを扱うタイプが「グラフィット」にあたる。

結果的に丹下研の「URTRAN」の開発は十分な成果をあげることなく終息したが、人間・機械系への着目、「ウルボット」「リボット」2種類のサブシステムがフィードバック回路で接続し「人間のくせ」までを学習させようとした点などは現在のAIとも通底する概念であり、こうした丹下研の視座は今日において承前啓後されうるべきものであった。

※(図1・図2)出典
1967年4月1日/彰国社発行/建築文化No.246

水谷 晃啓 MIZUTANI Akihiro

建築家。M2A主宰。豊橋技術科学大学 准教授。博士(工学)。1983年生まれ。2013年芝浦工業大学大学院博士(後期)課程修了。2009年隈研吾建築都市設計事務所。2010~14年SAITO ASSOCIATES。2013年芝浦工業大学博士研究員。2014年~豊橋技術科学大学。東京電機大学、芝浦工業大学非常勤講師。

豊橋技術科学大学大学院 准教授
M2A主宰
博士(工学)・一級建築士

水谷 晃啓



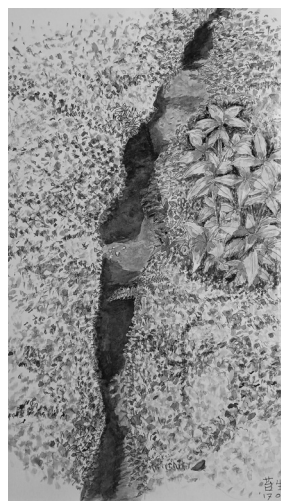
第15回 JIA愛知 美術サロン展 4年ぶり開催!

4月18日(火)~23日(日)まで、東桜会館にて第15回JIA愛知美術サロン展がコロナ禍で延期、4年ぶりに開催されました。入場者は約250名と例年より少なめでしたが、リピーターが多く見受けられました。JIA会員の鑑賞者が数名というのは、寂しい限りです。JIAが公益社団法人ならではの、JIA非会員の方3名の出展がありました。出展者9名の作品とコメントをご紹介します。

JIA愛知美術サロン 代表幹事 田中 英彦



展示会場の様子



先年訪れた京都の寺の庭が美しく、写真に収めて帰った宿で仕上げました。昼下がり、雨が上がり、雨上がりのチョロチョロと流れる水ミチとキラキラ輝く苔の様子がうまく表現できていませんが、気に入っています。

苔生す 水彩:F8号

小田 義彦 伊藤建築設計事務所



生の森・死の森 透明水彩:8号

日常はランドスケープアーキテクトとして緑とふれ合いながら仕事をしています。大好きな自然と向き合うために透明水彩で大自然を描いているのですが、上高地は悠久の歴史の奥深さが魅力です。梓川を挟んで左側が生の森、右側が死の森に思えました。

小島 篤(非会員) 都市デザイン研究所



旧帝国ホテル(明治村) 油彩:P30号

2019年に、JIA愛知美術サロンのスケッチ会で明治村へ。旧帝国ホテルは1923年の関東大震災時に開業、1967年建て替えに伴い、玄関と中央部分のみが移転保存された。大震災を凌いだ、フランクライトの帝国ホテルは、ひっそりと佇んでいました。

田中 英彦 連空間都市設計



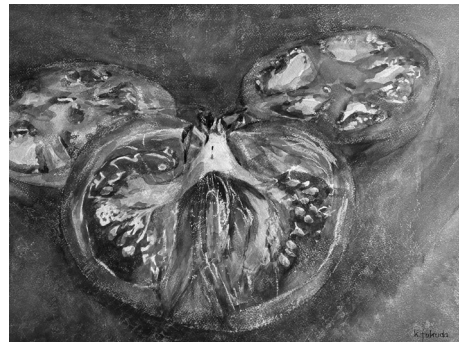


散歩の時などいつも笑っていた愛犬(家族)です。人も動物も笑顔は素晴らしいですね。

幸せなひと時 ピッピ 水彩:10号



花岡 正康(非会員) ブルーウム一級建築士事務所



トマト 水彩(+パステル):710×570mm

3年半前に緑内障の手術をしたため最近は絵の制作をしておらず、描きかけで置いてあった「花」を水彩で仕上げた2点に、パステルで描いたトマトの絵に水彩で加筆した作品他1点を出品したなか、特にトマトの絵が多くの皆様に興味をもつていただけた様です。



福田 一豊



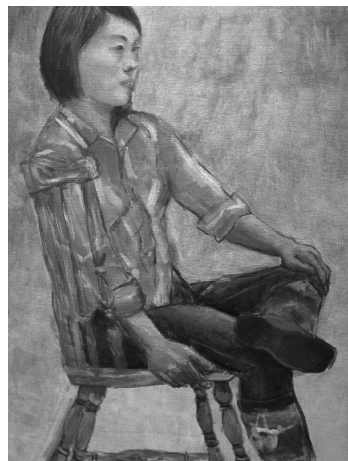
長い間眺めていられて安心できるような絵を描きたいなと思っています。楽しんで描いています。7/8~22, Gallery A.C.Sで個展を予定しております。

遠い灯

高知麻紙、墨、岩絵具(日本画)
S50(1167×1167mm)



増田 舞子(非会員)



20年ほど前からデッサン教室にかよった。その頃のモデルさんである。20年の歳月を感じさせない。笑顔がすばらしい。横顔をかきながら、人間としての心の伝わりがあるからこそ、いつまでも昔のままではいられるのではないかと感じています。

女性像1 油彩:F10



山田 尊久 山田尊久建築設計事務所



コロナ禍前にアンコール遺跡を訪ねることができた。数か月後の美術サロン展へだすために3点を描いた。案内ハガキも出来上がった開催直前に会場の閉鎖の知らせがあり、以後3年間、開催することが出来なかった。幸いこの4月に開くことが出来ましたが、不要となってしまった案内ハガキが残ってしまい、それを掲載させていただきます。

アンコールワット

楯ペニアに水彩:720×910mm



山田 正博 建築計画工房



デッサンで、いつも心がけているのは、量感の表現です。この世は、+の量(実体)と-の量(空間)で構成されています。そのバランスのとれた状態を表現するように心がけておりますが、デッサンはむづかしい、けれどデッサンは楽しい。

量感の表現



吉川 法人 吉川法人+都市建築デザイン室

※(故)神谷義夫氏は、ご遺族の意向で掲載を辞退されました。

第28回 JIA東海学生卒業設計コンクール2023 最終結果のお知らせ

5月13日(土)に「第28回JIA東海学生卒業設計コンクール2023」が開催され、受賞作品が決定いたしました。
金・銀・銅賞の5作品がJIA全国卒業設計コンクールに選出されました。



⇒ 金賞 ⇐ 「同窓会アパートメント」

-大学同窓会の再評価による新しいコミュニティのかたち-
遠藤 あかり(金城学院大学)

⇒ 銀賞 ⇐ 「山を建てる」

佐藤 直喜(名古屋工業大学)

⇒ 銅賞 ⇐ 「循環する都市の履歴」

松井 宏樹(名城大学)

⇒ 銅賞 ⇐ 「水の循環で生まれる暮らしの環 -上下水道から自立した都市の住まい-」

牛田 結理(名城大学)

⇒ 銅賞 ⇐ 「庁舎建築再考」

神谷 尚輝(名城大学)

⇒ 入選 ⇐ 「建築と反復 -多様性と差異を生む反復手法-」 伊藤 亮太(名古屋工業大学)

「新雨池の縁 -住み開きする御器所長屋の提案-」 萩原 裕佳(名古屋工業大学)

「経年美を辿る -旧・宇治川電気志津川発電所の遺構の活用-」 井上 祐紀(名古屋工業大学)

「Architectural UPCYCLING -最終処分場から創作活動拠点へのリパース・コンバージョン-」 浅田 慎伍(名古屋工業大学)

「みまもりあいのミライ -元漁師町から次の世代へ-」 永井 里奈(名古屋工業大学)



自作自演

私の仕事

09

ちょうど10年前アトリエ事務所での長い設計活動を終え自立しました。「ビジネスアーキテクト、デザイナーアーキテクト、そして地域のコミュニティアーキテクト」というJIAの職能教示にその後の方向を見つけました。

大学卒業後組織事務所のビジネス

まちづくりの系譜 コミュニティアーキテクト

アーキテクト、そしてアトリエ事務所でのデザイナーアーキテクトとして公共建築から商業施設、住宅、ランドスケープ等々の計画に携わって来ました。

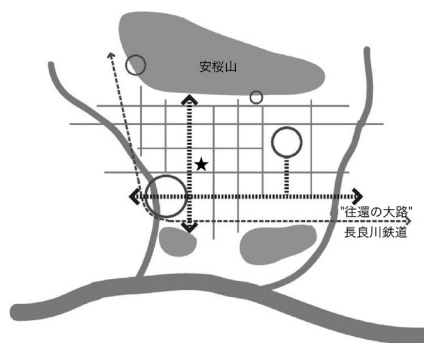
地域コミュニティは700有余年の刃物の歴史をもつ「刀匠のまち」関市です。帰省後まちの起源と言ってよい春日神社

(刀匠による大和の春日大社御分霊の勧請)エリアを含む関市景観計画重点地区候補「刃物ミュージアム回廊」のプロポーザル(共同提案)を機会に、街の歴史文化や地勢に基づいたまちづくりビジョン『都市形成史と景観まちづくり』を関市に提言しました。

「スマイルしんかい」の敷地は長良川鉄道(旧街道“往還の大路”並走)が東西方向から濃尾平野を北上する変換点・扇の要に当たる「関春日神社」の北東対角で旧市街地の真ん中に位置し、街の景観背景「安桜山」が北にあります。計画は刃物と都市形成史をまちづくりの景観コンセプトとして、歴史文化を継承発展するコミュニティ環境に“賑わいの場”を創出することを目指しました。



スマイルしんかい 撮影/STUDIO WORKS



街の骨格 - 歴史と都市軸

沼田 叡良 (JIA岐阜)

NT建築計画事務所



名古屋市の西南部は、庄内川によって運ばれた土砂の堆積により形成された低地帯であり、農業に適した肥沃な土地であった。庄内用水は灌漑用として元亀・天正年間(1570～92)に尾張侯が開削させたと伝えられている。

正保4年(1647)に熱田新田の干拓が始まり、用水確保のために南へと延長した。庄内川からの取水地点も、稲生村、日比津村、川村と、

場所を変え、明治10年(1877)に行われた黒川(堀川)の開削により、庄内用水の経路は大きく変わった。八田川と庄内川との合流点近くで取水し、矢田川の下を伏越で越え、庄内用水、黒川、御用水(現在は無い)に分流された後、西区の従来の水路に接続する現在の庄内用水の姿がこのとき形づくられた。

過去には水質の悪化もあったが、近年では、

水質も徐々に改善され水辺が都市の潤いの場所として見直され、水質も改善されたことから、昭和59年(1984)からポケットパークを設けるなど緑道としての整備が進められた。この事業は、建設省の「昭和62年度手づくり郷土賞一水辺の風物詩」の一つに選ばれた。



写真①-2 庄内用水緑道(名塚町)



写真①-1 庄内用水緑道(名塚町)



写真② 庄内用水緑道(枇杷島) 滑り台があった跡



【参考資料】

庄内用水/名古屋市土木局河川部計画課(平成4年3月)

名古屋の河川/名古屋市緑政土木局

河川部河川管理課(平成24年3月)

塚本 隆典 (JIA 愛知)

塚本建築設計事務所



編集後記

●建物の長寿命化といった外壁仕上、屋根防水の改修、老朽化した設備機器・配管の撤去更新と

といった改修設計業務が当り前になった今日この頃である。SDGsと言えば聞こえがいいが、建て替えの予算が無いことの先送り手段とも取れる。躯体の耐用年数が過ぎたものは改築されるが、予算が確保できるかどうかはさておき膨大な数の官公庁や公立の小中学校・高校を建て替えなければならない。その頃には設計業務もAIによる標準設計システムが開発され、設計の省力化が行われているのだろうか。第28回JIA東海学生卒コン2023の審査結果が発表された。卒コン委員会には1998年～2013年委員としてお手伝いした。北山 恒氏が審査委員長を務められていた時(2006・2007年)にそれまでは審査委員だけ

で入選、入賞を決めていたものを、公開プレゼンテーションにして出品者にも発言させるべきだと委員長が提案したことにより公開審査が行われるようになった。(廣瀬 高保)

●地球温暖化がもたらす、気候変動による水への脅威はこのところ各地に身近に迫りつつ有るところです。保存情報で紹介されている、庄内川の歴史ある水への取り組みは現在の街の憩いとして生まれ変わり、その景観が心まで潤してくれる地域の誇りとなっていると感じました。また東海大会開催記念特集02は、常滑を舞台に開催地の歴史文化の継承と今後のみちづくりをめざし、全国に発信できる貴重な交流の場として現在企画は進みつつあり、支部一丸として作り上げてゆく必要があると思います。大河ドラマ「どうする家康」の注目に関連し、家康の原風景はどうだったのかと題して寄稿をいただいています。家康8歳～19歳の間駿府に過ごす、その時の人格形成は、原

風景はまさに富士山ではなかったか、そのことを裏付ける歴史上の事実など興味深い内容となっています。続編の掲載もあるとのこと楽しみにしています。(江川 静男)

ARCHITECT

第418号

発行日 2023.7.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会

愛知地域会プリテン委員会

株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/

小さくて大きな大会

「小さくて大きな大会」地域に根ざしたコンテンツと参加者を中心に濃密な大会にしたいと思っています。当初、メインシンポジウムの登壇者選びは、メジャーな方の名前がおおくあがり、一般の方でもよくご存じの方たちでした。交渉を始めたのは良いのですが、つながることも難しく、つながってもすぐに返事は来ない。時間ばかり過ぎる。なんのためにやっているのか疑問が湧いてきた。私達、建築家であり、興行を行うものでもありません。そもそも、全国大会は、地域の目線で考えるもので、その地域の特徴を活かせれば良いことです。

東海にはすぐれた人が多く存在しています。メインシンポジウムも常滑やこの地域で活躍する方に登壇していただくことにいたしました。ここで、登壇者紹介しておきます。

INAXライブミュージアム学芸員 後藤泰男氏 東京駅のタイルの復元などに携わり、やきものやテラコッタなど幅広い知見があります。陶芸研究所学芸員 小栗康寛氏 考古学の研究を経て常滑窯業史をまとめており、愛のある陶芸研究所、堀口捨己談義は、是非みなさんに聞いていただきたい。次に、ColU理事長候補 井上博成氏。現在34歳で、「理論と実践がループする」取り組みを続け、飛騨高山で小水力発電会社や信託会社など企業しており、「地域の

価値化・共創 新しい教育の形」をビジョンに飛騨に大学誘致を進めている。若い起業家です。建築家の登壇者は、古谷誠章氏、ファシリテーターをお願いしたいと思う。

ここ常滑を体験し、日本や世界にひろがる議論をしたいと思う。

全国組織JIAとしての大会の作り方

地域で開かれる大会を、全国の仲間とつくりあげる大会へしてみよう。

コロナを経験したことで、webを使ったイベントは、沖縄大会で成功したと言えます。

東海大会では、本大会の前、4週間のイベントを「建築家ウイーク」と呼び、全国の支部や全国会議に大会テーマ「環る」のそったシンポジウムなどの企画をお願いしたい。

おおきなイベントを小さな支部でも、濃密に構築できるよう、全国から手をだしてつくりあげる実験的な試みです。

地域によりそう建築家をめざして

すでに、常滑にいくども足を運び、いくたびに新しいことに出会えます。常滑とのつながりがふえるなか、大会が閉会した後も、建築家の役割としてつながってほしいと思う。

常滑とまちづくりに関する、緩やかな結びつきを継続すること考えている。

テーマ「環る」

地球環境の変化は大きな災害を呼び、国際情勢や経済環境の変化により新たに生まれる価値は有用な過去までも消し去り、時に地域や人々のつながりまでも壊してしまいます。これは人為によって まわり、めぐっている とも捉えられます。同じところにかえる ことができないとすれば、今、必要とされるのは、地域や街や人々を 快復させる力 なのかも知れません。

開催地「常滑(とこなめ)」は、六古窯の一つで、焼き物の世界的産地でした。産業構造の変革により役割を終えた煙突や窯が壊され、往時の風景は消えつつあります。この街が、この地が育んだ文化が、過去を継承しつつ、よみがえる知恵 を、ここ「常滑」を舞台に、日本から地球へと拡げて考えてみましょう。

大会を開催する意義

建築やまちづくりのことをテーマにそって真摯に議論すること。全国の建築家と交流を深めること。これらも意義であるが、大会を主催することの意義として、企画をする楽しさがあるのではないかと。皆さん、一緒に企てませんか。まだまだ、やるべきことはある。今からでも間に合う。是非いっしょに。

【大会概要】

建築家大会ウイーク

10月12日から11月8日 の4週間
webを中心とした、各支部・全国会議主催のシンポジウムなどの開催予定

本大会 (会場は6月号を御覧ください)

11月9日(1日目) 西尾コンベンションホール・あかりコンベン・INAXライブミュージアム特別見学・ウエルカムパーティなど

11月10日(2日目) 常滑街歩き企画・大会式典・メインシンポジウム・レセプションなど

11月11日(3日目) エクスカーション



※5月31日 支部総会



浅井 裕雄 (JIA愛知)

大会実行委員長

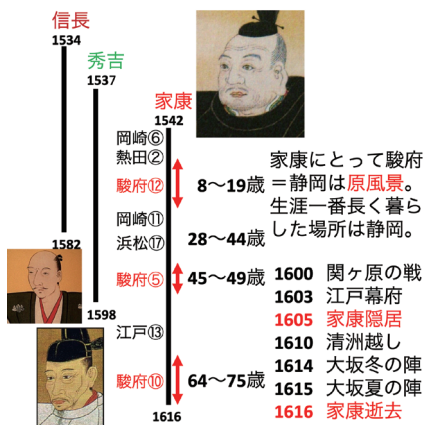
家康 × 原風景 = 富士山

～家康の原風景は、どのような行動を起こさせたか～

NHK大河ドラマ『どうする家康』がはじまったこともあり、現在、改めて徳川家康が注目を集めている。

下に示した年表を見ていただきたい。家康の75年の生涯のうち、駿府で過ごした年数は、12+5+10=27年で浜松よりも、岡崎よりも一番長い。しかも8歳から19歳を駿府で暮らしている。現代で言えば小学校2年から大学1年まで駿府なのである。まさに駿府は家康の“原風景”なのだ。この原風景としての駿府が家康の生涯において、どのような影響を与え、どのような行動を起こさせたのだろうか。

“原風景”という言葉が初めて世に出たのは、1972年に出版された奥野健男の『文学における原風景』だと思う。このなかで奥野は、作家の作品は幼年期・少年期に過ごした場所の記憶や環境が色濃く反映されていると論じている。大江健三郎は愛媛の山中、井上靖は天城湯ヶ島、坂口安吾は新潟、太宰治は津軽など、彼らはたえずそこに立ち還り、そこを原点として作品を書いている。それは自己形成空間としての“原風景”なのだと述べている。



信長・秀吉・家康の生涯年表

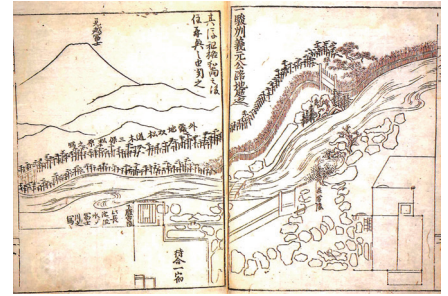
この原風景は作家にだけ存在するのではなく、誰もが“原風景”を持っている。では徳川家康の原風景は駿府のどこだったのか、想像してみるとおもしろいと思う。家康の原風景は、ずばり駿府の町から見る「富士山」だったのだと思うのだ。家康がとった行動が、このことを如実にあらわしている出来事を語りたいと思う。

右上の図は元禄7年(1694)に出された『古今茶道全書』のなかの「駿州義元公路地庭」と呼ばれ、遠景に富士山が描かれている。この庭園が実在したかどうかは明らかではないが、今川氏が富士山を意識して造ったことは充分考えられる。そして幼い家康が今川屋敷からこのような庭園越しに富士山を眺めていたことを想像すると、実にたのしいではないか。毎朝富士山を見ることが習慣になっていたのではないかとってしまうのは私だけだろうか。

家康は江戸に幕府を開くと、わずか2年後に駿府に隠居して、大御所として辣腕を振るった。誰よりも思い出深い懐かしい「駿府」を選び、ここを城下町として生まれ変わらせたのである。

家康の城下町を造ろうとする計画意図は三つあった。①東海道を本通から新通に変更、②武家地・寺社地・町人地による住み分け、③50間四方の町割りである。

家康は1607年に天下普請により駿府城を修築すると同時に、今川時代から残る本通から新しく「新通」を開いて、ここを東海道とした。これは駿府城と富士山が見事な風景をつくり、駿府の威厳を示す演出をつくり出す意図があったのである。



「駿州義元公路地庭」『古今茶道全書』



「宝永年間駿府鳥瞰図」駿府博物館蔵

家康は上の絵図の通り新通の真正面に駿府城天守を配した。西から安倍川を渡ると、天守の右に富士山が高くそびえる。駿府の街に入り進むと天守と富士山の高さは逆転し、天守が高くそびえてくる。家康はそのシークエンスを来る人に印象づけ、駿府の威厳を示したのである。

実はもう一つ、家康×原風景＝富士山を体現した重要な事がある。紙面が尽きた。別の機会があれば、もう一つの出来事についても語りたいと思う。

【参考文献】

奥野健男『文学における原風景』1972.4集英社
桐敷真次郎「慶長・寛永期における都市景観設計および江戸計画との関連」1972.1東京都立大学

塩見 寛

Kei_machizukuriネットワーク 代表
NPO法人くらしまち継承機構 理事

